

一、大嘗祭とはいかなるお祭りか

さて、即位礼に続き、十一月十四日夕方から翌日未明に、皇居の東御苑に設けられた「大嘗宮」において、天皇一代に一度だけの「大嘗祭」(大嘗宮の儀)が行われます。毎年秋、天皇陛下は、その年の新穀を神々に供え、感謝を捧げる新嘗祭を行われています。即位後はじめて行われる新嘗祭を「大嘗祭」と称します。

この大嘗祭の内実がどのようなものであるかについては、平成の御代替わりの際にさまざまな学説が提出され、その後も地道な研究が積み重ねられて、大嘗祭の理解は進んできたのです。

今年の四月三十日のNHKスペシャル『日本人と天皇』では、大嘗祭でどのような所作が行われるのかについて、國學院大学名誉教授で神道史学者の岡田荘司先生などによる研究者の監修による、再現映像も放映されました。国民の正しい理解のもとで、新天皇の大嘗祭を行おうという関係者の熱意を強く感じました。

大嘗宮は萱葺屋根・黒木造りという、できるだけ自然のかたちにかいかい建物である悠紀殿・主基殿の二つの建物を中心としたもので、そこで二日にわたりお祭りが行われます。一日目の夜、天皇陛下が純白の御祭服をお召しになり、悠紀殿に入られます。そして御座と呼ばれる畳の上に御され、神座と呼ばれる畳に向かわれます。神座は伊勢神宮のある方向を向いており、ここには伊勢神宮の御祭神であり、皇室の御先祖である天照大神と、それに伴う天神地祇がいらつしやると考えられています。なお、「神座」には「籠服(あらたえ)」「麻織物」・「繪服(にぎたえ)」「絹織物」が捧げられています。

そして天皇陛下は柏の葉でできたお皿に、米や粟、海産物や果物を一つ一つ、自ら「神饌」の盛り付けをされます。この際、そして、天下安寧を祈る「御告文」を読まれた後、「直会」として自らも神饌をお召しになります。そしてそのまま日をまたぐかたちで、主基殿で同じお祭りを繰り返されるのです。

なお、江戸時代の桜町天皇の時の「御告文」は「…諸神のひろきまもりによりて、國の中たひらかに、年穀ゆたかにして、たかきいやしきをおほひ、もろもろの民をすくはむ。よりにてことしあらたにゑたるところの、にみおものをたてまつる。…」(東山御文庫本元文三年(一七三八)大嘗祭作法覚次第)とあり、現在も同様の内容を含むものと考えられています。

このようなお祭りのあり方は確かに素晴らしいものです。しかし、毎年十一月二十三日(勤労感謝の日)に皇居の神嘉殿において天皇陛下が行われる新嘗祭と、大きく異なるものではありません。実際、奈良時代の歴史書である『続日本紀』に収められた称徳天皇のお言葉(宣命)において、大嘗祭は「大新嘗(おほいなめ)」と称されているのです。さらに言えば、収穫された農作物・海産物などを神に供えてお祭りをし、その収穫に感謝して、「直会」として人々が神とともにその収穫物を食べるというのは、全国で秋祭りとして広く行われているものです。大嘗祭は、そのような、日本列島の農耕文化に深く根差したお祭りなのです。

二、大嘗祭の来歴と意義―なぜ大嘗祭は特別なのか―

江戸時代の国学者・本居宣長は『古事記伝』において大嘗祭・新嘗祭の「ナメ」は、本来は「新稲で饗す」(おもてなしする)という意味であったとしています。また漢字の「嘗」は、中国の古い漢字の辞書を見ると、『説文解字』は「口にてこれを味わう」とし、『爾雅』は「秋祭」としています。漢語にも日本語にも、「嘗(ナメ)」には食べ物で神をおもてなしするという意味があったのです。

古くは「新嘗祭」は広く社会において行われていたようです。奈良時代の『風土記』や『万葉集』のほか、『日本書紀』には、大化改新の直前の皇極天皇の時代の出来事として、天皇のほかに、皇子たちや大臣(蘇我氏)もそれぞれ新嘗祭を行っていたと記しています。大嘗祭と新嘗祭の違いはどこにあるのでしょうか。

大嘗祭と新嘗祭の違いについて、神道史学者の高森明勅先生は、新嘗祭で供される米・粟が、かつては皇室の直轄地である畿内の官田から出されていた(現在は全国からの献穀)のに対し、大嘗祭は、神祇官の亀ト(現在は「斎田点定の儀」)により決せられた悠紀・主基の国郡が米・粟などを献じ、大嘗宮の建設にも関わっていたことが重要であるとしています(『天皇と国民を結ぶ大嘗祭』展々社)。

亀卜という、うらない（これは大陸から伝来したもので、当時の最先端の技術であったことが指摘されています）で決められるのですから、どの国（そしてその下の地方行政単位である郡）が大嘗祭に奉仕するかわからないわけです。これはつまり、**全国どの国も、大嘗祭に奉仕する準備ができていた**ということを示しており、大化改新以前の、さまざまな豪族が土地や人民をバラバラに支配していたものとは違う、**天皇のもとの公地公民制を象徴する祭祀であった**と高森先生は指摘しています。

このような大嘗祭のあり方が最初に現れるのは飛鳥時代の天武天皇の時代です。天武天皇は先に登場した皇極天皇の皇子で、蘇我本宗家を倒し、「大化改新」の中心となった兄の中大兄皇子（天智天皇）とともに、政治・行政改革などに関わった人物でした。天智天皇が崩じられた後は、古代最大の内乱といわれる「壬申の乱」を収拾し、即位されます。天武天皇はおそらく、兄君の意思をつぎ、再び内乱が起こらない統一国家を作り、中国（唐）・朝鮮（新羅）の国々とも互角に交渉していかうとお考えになったのでしよう。まさにその第一歩として天武天皇は即位に際して、悠紀・主基国を選び、その奉仕による「大嘗」のお祭りを行ったと『日本書紀』は記します。その後の天武天皇は、妻で姪の鷓野讚良皇女（天智天皇の娘、後の持統天皇）と協力して、官僚制や地方行政を整備し、法典や歴史書の編纂を命じられました。

実は天武天皇の時代には、毎年の新嘗祭を「大嘗祭」と称し、悠紀・主基国を選んでいたのですが、これはやはり負担が大きかったようで、次の持統天皇の時代には即位に際してのみ、悠紀・主基国が選ばれるようになります。そしてその即位に伴う「大嘗祭」のかたちが、天武・持統天皇の孫にあたる文武天皇の時代に「大宝律令」に規定されます。まさに「**大嘗祭**」は**歴代の天皇陛下のもとで、「日本」という国が一つにまとまっていることを示すお祭り**であるといえるでしょう。

その後、大嘗祭は長く続けられたのですが、戦国時代になると、朝廷もその後ろ盾である室町幕府も衰退し、大嘗祭を行うことが難しくなります。結果的に、後土御門天皇から、後柏原天皇・後奈良天皇・正親町天皇・後陽成天皇、そして江戸時代の後水尾天皇・明正天皇・後光明天皇・後西天皇・靈元天皇は大嘗祭が行えず、実に東山天皇の時代の再興まで、二二一年にわたり断絶することになりました。後奈良天皇は大嘗祭が挙行できないことについて、伊勢神宮に「**大嘗会、悠紀・主基の神殿に自ら神供を備えること、その節を遂げず。あへて怠れるに非ず。国の力の衰微を思ふ故なり。…**」（東山御文庫所蔵「後奈良天皇宸翰宣命案」）という宣命を奉っておられます。東山天皇の時代の再興には無理も多く、次の中御門天皇の際には行われませんでした。しかし、次の桜町天皇の時には江戸幕府（將軍徳川吉宗）の財政的援助もあり、再び行われ、以後、現在まで続いています。

また、明治の時には、東京奠都の後に、大嘗祭はどこで行うかが議論になりました。最終的に明治四年（一八七一）、東京で行うことになったのですが、その際には大嘗宮に入る明治天皇には太政大臣三条実美のほか、西郷隆盛ら武士出身の参議が直垂姿で従い、また欧米各国の大使・公使を饗宴に招待し、大嘗祭の意義を外務卿副島種臣が解説しています。また大嘗祭に際して、明治には悠紀国・主基国から、大正以降は全国から特産の農水産物が献じられ、大嘗宮の悠紀・主基両殿の南庭の庭積帳殿の机上に供進される「庭積机代物」や、大嘗祭が終わった後の大嘗宮の見学を国民に許可し、また諸外国の大使・公使を招いての饗宴を開催するなど、**国際的・国民的行事として大嘗祭を位置づけようとしています**（なお、大正・昭和の大嘗祭は明治の皇室典範に基づき、再び京都で行われ、平成の大嘗祭は東京で行われています）。

かつて大正大礼に際して、大礼使事務官を務めた、民俗学者の柳田國男翁は、京都において短期間に行うために「殊に御即位礼と大嘗祭とを同じ秋冬の交に引続きて行はせらるゝと云ふ点は頗る考慮の余地ある所なり」とし、**国際的な儀式である即位礼と、民俗信仰に根差す大嘗祭を分けて行う必要性を指摘**しています（「大嘗祭に関する所感」『柳田國男全集13』ちくま文庫、当時は非公表）。今回の一か月の間をあげて即位礼・大嘗祭の挙行はこの柳田翁の意見が長い時を経て実現したものともいえるでしょう、

即位礼にしろ、大嘗祭にしろ、その伝統は、常に継続していく意志をもち、努力してきた先人たちの努力の成果であることを忘れてはなりません。